

テーマ：校内研究における教員の成長と資質向上の研究

研究代表：中妻雅彦（教職実践講座）

1. 研究の目的と成果

日本の学校教育の伝統である学校における校内研究による教員の成長と資質の向上の在り方を、実際に学校の校内研究に参加しながら、学校の共同研究の意義を実践的に明らかにすることを目的としている。

(1) 学校見学や校内研究へ参加によって、校内研究の現状は、二つの傾向に分かれていることが確認できた。第一は、共同研究による従来からの授業研究である。第二は、「現職研修」等の名称で行われている授業研究である。第一の方法を取り入れている地域、学校では、初任者あるいは若手教員の授業研究を学年団やブロック集団によって共同で討議することが行われており、教員の成長を保証している。これらの方法は、北海道松山地域、愛知県の一部、福井県等で確認できた。一方、第二の方法では、個人研究が中心となり、授業研究に参加する教員も多くなか、助言等の内容も限定的であることが分かってきた。これらのことは、東京都、愛知県の一部の学校研究の参観によって見ることができた。

(2) 北海道、茨城、東京、静岡、愛知等の教員へのアンケートによって、共同的な校内研究が行われている地域や学校では、若手教員の研究に対する協力協同の仕組みが機能しており、1時間の授業や1単元の指導計画にとどまらず、学級経営、児童把握の多面的な要素を同時に学んでいることが明らかになりつつある。また、こうした地域学校の教員が、学校内だけでなく、学校外での自主的な研修等にも積極的に参加していることもわかってきた。教員の資質向上にとって、学校内外での研究研修と教員自身の主体的な参加が求められているが、協同的な校内研究が行われている地域の教員の学校外での研究研修の数的な優位は、校内研究の在り方を考える意味を持つものであると確認できた。

(3) 韓国の小学校、高校の授業参観および教員との交流によって、現在、日本の授業研究のような学校内での研究研修は行われていないが、教科ごとに自主的な研究会が開かれ、授業実践の交流がされていること、および、日本の授業研究を知っている教員からは、韓国の学校でも授業研究が学校で実施できないかを探っていることが紹介された。また、教員2年目の先生の授業とその後の懇談で、授業研究がないことで、誰からも授業へのアドバイスがなく、困難がることも聞かされた。これらのことから、日本の授業研究、校内研究が教員の資質向上に果たす役割は大変大きいといえる。

(4) 新たな視点として、若手教員が積極的に授業研究を進めている学校では、「モデル」となる教師の存在が共通点となる。これは、共同研究的な校内研究、授業研究を進めている学校の共通点でもあるが、これらの「モデル」となる教師の存在は、若手教員の成

長にとって、目標となり、あるいは「伴走者」ともなっているが、これらの教師の役割については、今後の課題である。

2. 今後の課題

質問紙調査及び学校訪問によって、共同研究のもつ意義や価値を確認することができた。しかし、共同研究の内容や方法は、地域の学校文化によって相違点があり、一般化するには困難があるが、共通する内容や研究過程において新たに発見した「モデル」となる教師と若手教員の関係や在り方、「モデル」となる教員の資質を見出すことが求められる。さらに、教員養成長期化、修士化の動向を踏まえ、教職大学院と若手教員の資質向上の連携についても提案することが課題となろう。

※詳細は、「校内研究における若手教員の成長と課題（1）」（『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』第61輯）を参照いただきたい。

（参考資料）

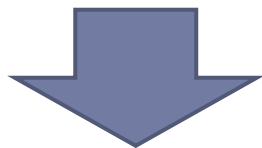
- ・ 日本教育方法学会第47回大会研究発表資料
「校内研究における若手教員の成長と課題（1）」

校内研究における若手教員の成長と課題 (1)

愛知教育大学教職大学院 中妻雅彦

校内研究の果たした役割

- ▶ 教員の資質向上に積極的な役割
= 日本教育の質を支えた
- ▶ 教育実践(実務)しつつ、資質の向上(研修研究)
実践が研修研究課題を生み、
研修研究が明日の指導に生きる



教師としての「やりがい」「生きがい」
評価は、日々の子どもの姿と笑顔



校内研究の現状

- ▶ 教員の年齢構成の変化

= 若手教員の急増と中堅層の激減

教育方法、教育技術の継承が困難

教材研究等の不足

- ▶ 都市部と過疎地域の小規模化

学年、ブロック、教科集団が形成できない

共同研究ができない

- ▶ 業績評価制度の導入

個人内評価 = 個人目標と実績

同僚性の崩壊



校内研究の育てた力

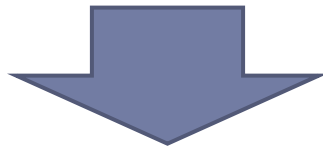
▶ 従来からの伝統的協同的校内研究

①協同 学年ブロック等による集団的な研究

②継承

事前研、事後研中心の討議と教育課程への反映

③事実 子どもと地域の実態からの発した研究課題



学校づくり、教育課程づくりにつながる校内研究

子どもと学校が変わる = 「やりがい」「生きがい」

教師の授業力、資質向上につながる研究

業績評価のもとでの研究

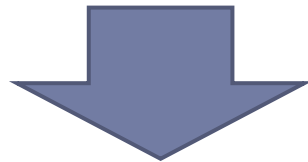
▶ 現職研修等

①個別 個人目標と数値化

②要請

年次別(ライフステージ)等に設定された課題

③競争 孤立化された個別目標への到達



学校運営には直接つながらない

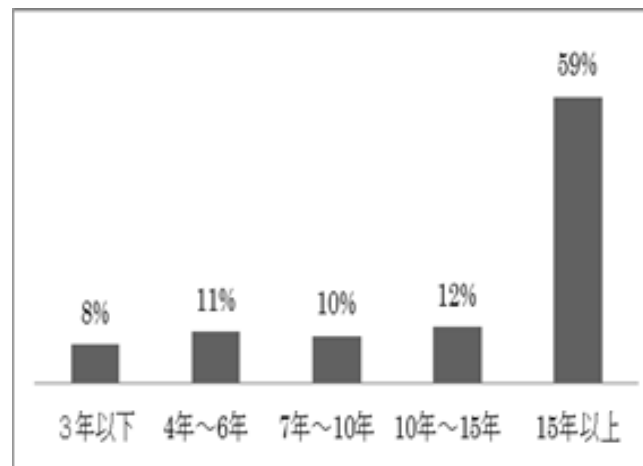
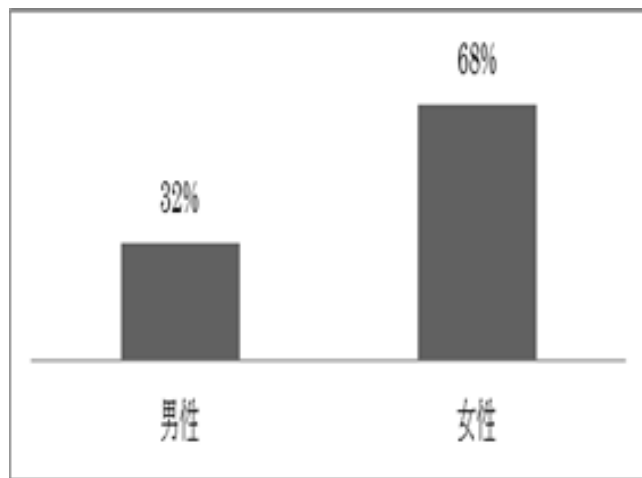
子どもの事実に向き合えない = 孤立化



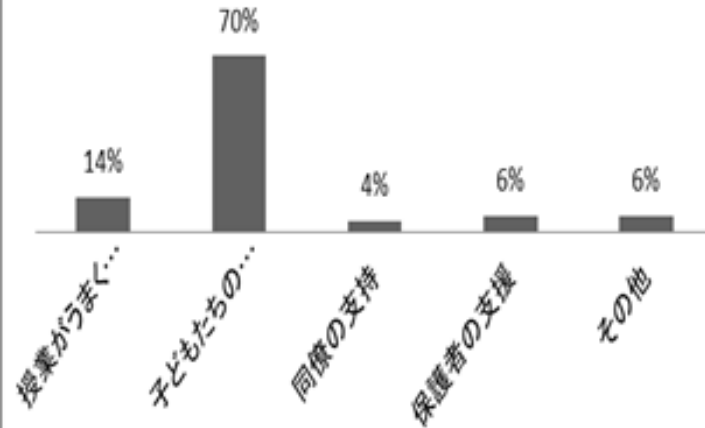
校内研究への期待と信頼

～教員アンケートから～

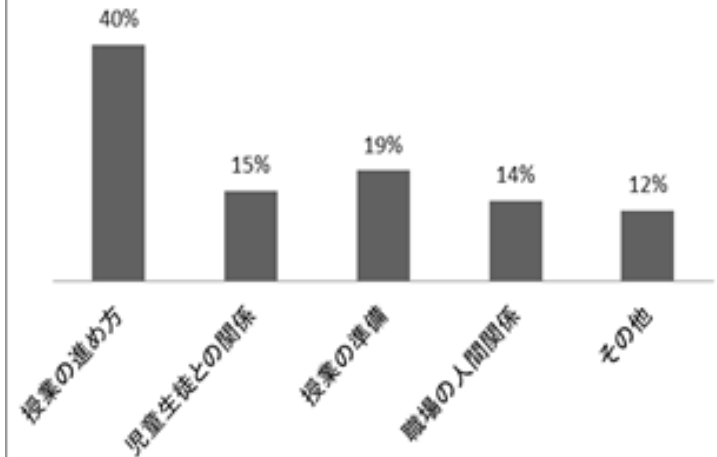
- ▶ 実施地 北海道A町、茨城県、千葉県、東京都、静岡県
北海道A町 = 伝統的協同的な校内研究実践地域
東京都 = 業績評価導入先進地域
- ▶ 回収数 164人(74%)
- ▶ 実施時期 2011年7月



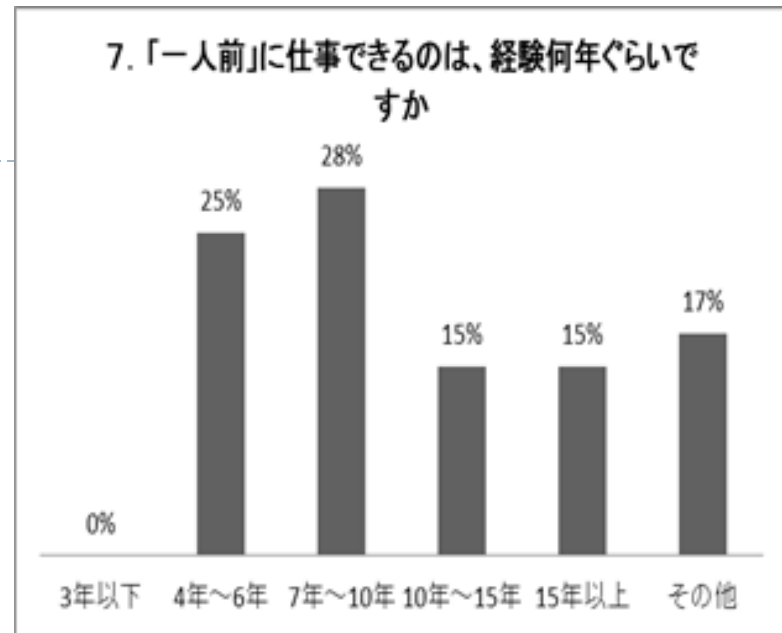
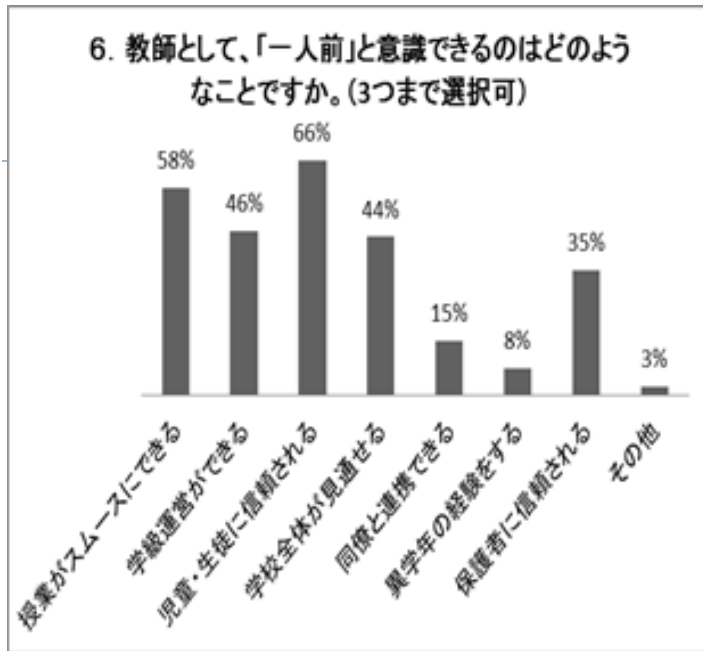
2. 採用3年目程度までで、一番、教師としてうれしかったことはなんですか。(1つ選択)



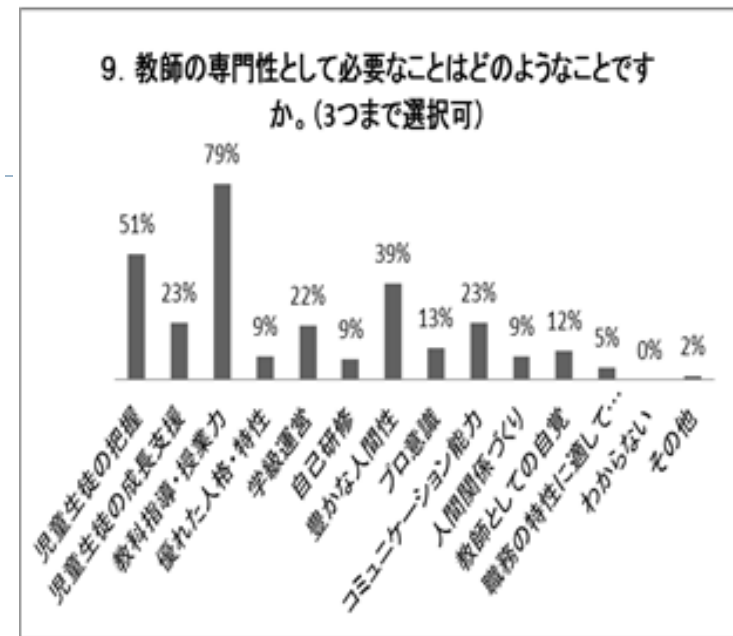
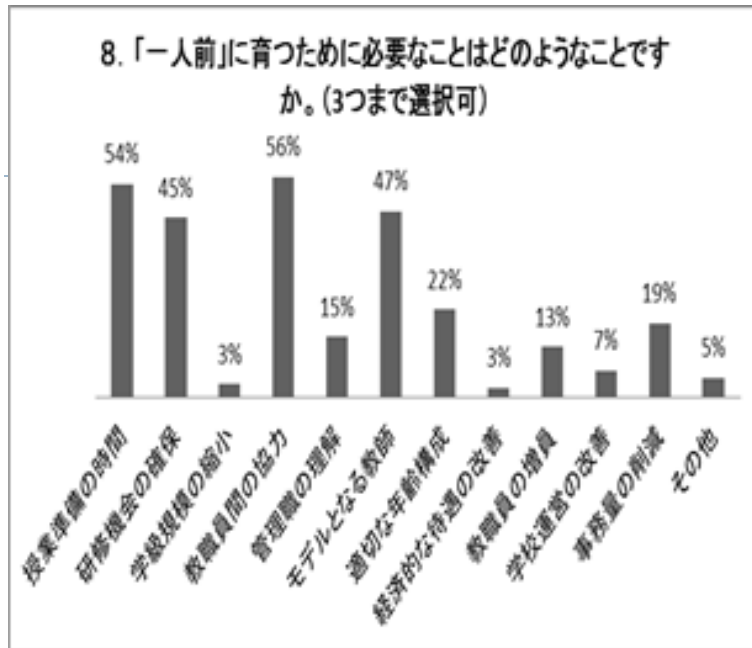
4. 採用3年目程度までで、一番、教師として困ったことはなんですか。(1つ選択)



- ▶ 初任期の教員は、良くも悪くも、授業によって教師としての「喜び」「困難」を感じている。
- ▶ 授業中心の研修研究が必要。

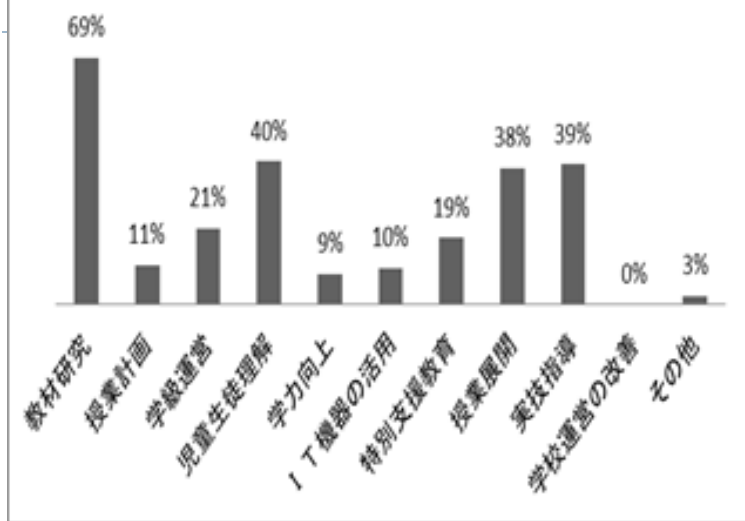


- ▶ 教師として「一人前」と感じるのは、授業と授業を通して子どもの信頼をされる。
- ▶ その年数は、4年から10年。初任後2校目がめど。
- ▶ この間に、授業力をつけることが必要。

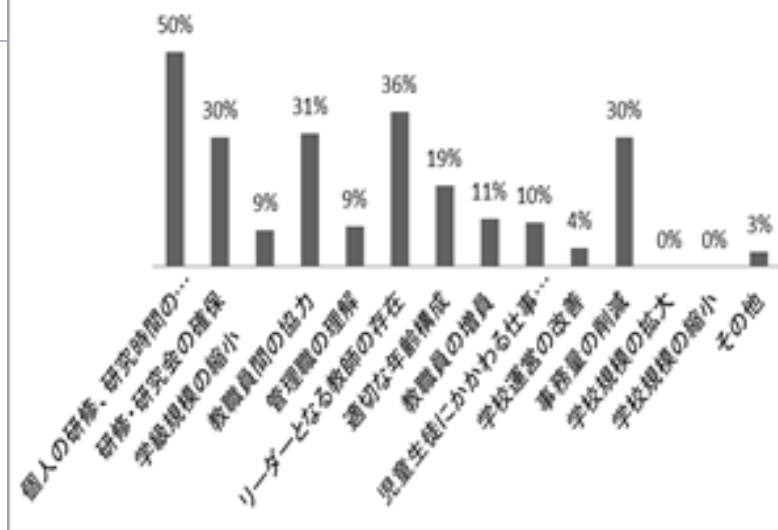


- ▶ 「一人前」に育つには、「協力」「モデルとなる教師」「授業準備・研修時間」が必要。
- ▶ 専門性の一番は、「授業力」。
- ▶ 集団的な研修研究の確保、モデルとなる教員のいる職員構成(年齢構成)

15. 学校内の研修、研究には、どのような内容が望ましいですか。(3つまで選択可)



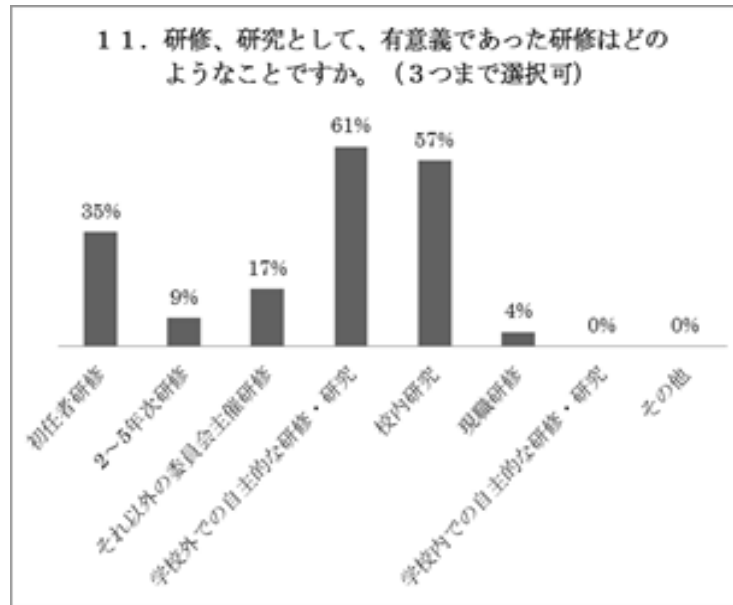
16. 学校内の研修、研究の改善のために必要なことはどのようなことですか。(3つまで選択可)



- ▶ 期待する研究は、「教材研究」「授業展開」「子ども理解」「実技指導」。
- ▶ 「研修研究時間、研修研究会の確保」「リーダーとなる教師」「協力」が、研究充実の鍵。

若手教員は？

▶ 回収 26人



- ▶ 「自主的な研修研究」「校内研究」への期待。
- ▶ 初任者研修に一定の評価（学校外の同期と会えるなども）
- ▶ 校内研修の充実が必要。

伝統的協同的な校内研究例

▶ 子どもと地域の現実に根差して



- ①児童の実態
- ②地域の現状
- ③協同的な目標
- ④学校づくりにつながる
- ⑤教育課程につながる
- ⑥明日の実践に生きる

この地域では、「学校外での研修研究」への期待も高い。

伝統的協同的な校内研究で育つ（1） ～若手教員のアンケートから～

13. 学校内の研修、研究で有意義であった具体的な例をお書きください。

- ▶ 校内研究を進めるための基本的理解の確認や具体的な進め方について資料をもとに校長が主になって研修してくれた。
 - ▶ 先輩方の授業を生で見られたこと
 - ▶ 教科研究
 - ▶ 道徳の研修会
 - ▶ 英語（外国語）活動の授業の流れや評価の在り方
-



伝統的協同的な校内研究で育つ（２）

～若手教員のアンケートから～

12. 学校外の研修、研究で有意義であった具体的な例をお書きください。

- ▶ 知り合いの先生伝えで聞いて参加した研修は基本的な学び方を学び直す、今も活用できるいい内容だった。
 - ▶ 専門的なことを学べたり、学級の実態にあった研修
 - ▶ 学校カウンセリング
 - ▶ 教科の研究会、他の学校での公開研究会
 - ▶ 道研の理科教育センターでの、身近な材料を活用してできる実験など
 - ▶ 特別支援教育センターにおける実習
-

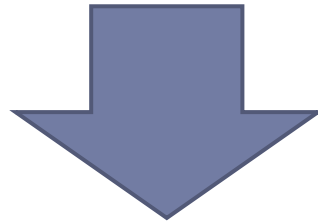


若手教員が求める研修研究（1）

① 教科及び授業研究への要求

「一人前」に育つ第1条件

丁寧な指導（事前事後研、相談的な内容への評価）



授業研究中心の校内研究

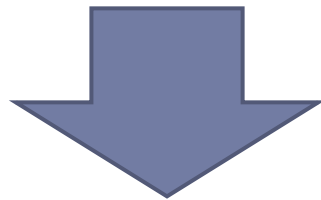
理念や意欲中心ではない

「～すべき」「～ねばならない」という押し付けの排除



若手教員が求める研修研究（２）

- ② 「授業技術」から「教育課程」の見通せる研究課題
まず目の前の子どもたちに
「明日の授業」に「役立つ」内容



発問・学習課題・技術等と

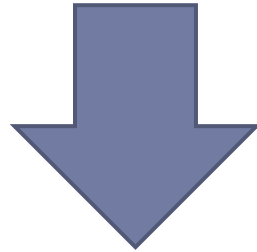
子どもの発達や教科の系統
学校づくりや教育課程編成につながる
組織の一員としての意識



若手教員が求める研修研究（3）

③ 先輩の授業

力のある教員から学ぶ



「モデル」となる教員
指導技術、指導方法の伝承



今後の課題

- ① 各地に採用が増加し、多様な経歴を持つ若手教員への聞き取り調査により、資質の向上、成長の歩みの考察する。
 - ② 校内研究における教職経験による発言の内容、意図等を協議会の実際に即した分析する。
 - ③ 若手教員が増加している地域、学校における校内研究モデルの提案と考察。
-

